

各駅停車・大分県歴史散歩

ふるさと駅

(15) 滝尾・中判田

初版：2007年6月8日

⑥3 豊肥本線

母なる川と九重山群



●この電子ブック「ふるさとの駅」＝各駅停車・大分県歴史散歩は、昭和58(1983)年7月20日から翌年の1月28日までの約半年間、115回にわたり大分合同新聞に連載されたものです。25年後の今年、電子ブックとして復刻しました。

したがって記事中の「いま」や「現在」は25年前の状況を示しており、その後駅名の変更や路線の廃止などもありますが、当時を思い浮かべながらお読みいただきお楽しみください。

■県下で最長最大の川

大野川は大分県で最長最大の川。このため「母なる川」ともいわれる。同水系に属する県内の川は本支流あわせて133本、総延長809キロ。いずれも一級河川として指定されている分だけである。流域面積1460平方キロ。全県土の4分の1近くを占める。

大分駅を出た豊肥本線は大分川を渡ったあと南下、

小さな峠を越えて大野川の岸に出る。以後、犬飼まで車窓に川を見て走り、大野郡に入ったあとも本流、支流をたどって竹田市から直入郡へと進む。鉄道は大野川と、それがはぐくんだ文化に深く結びつき、その動脈の役割を果たしてきた。

大野川流域の自然はみずみずしい。源流となる山々は、北に九重山群、南に祖母・傾山群。前者が明るい

草原を主体とした女性的なやさしさを見せれば、後者は岩峰、岸壁に深い樹林をまとった男性的ないかつい姿で迫る。そして行く手の西には世界一のカルデラを誇る火の山・阿蘇。

九州を代表する三つの山に囲まれた流域は、その名の通りに大きな野。『豊後国風土記』は「この郡のすぶるところ、みな原野あり」と述べる。小さな山、丘、野が、あるいは波うち、あるいは折り重なって続く。その間を、本流を幹として枝葉のように伸びる大野川水系。

河川は、いたるところに勝景を生み出した。滝をかけ、瀬となり淵（ふち）となり、清流は尽きることがない。と同時に、それは大地の血管。水は養分となって田畑をうるおし、魚を育て、人々はそれを飲み、舟を浮かべ、電気を起こし、工業用水とした。川は、まさに母そのものだったし、今後もそうだろう。

■多い石造文化財

川が生み出した文化は多様だった。特に、その流域に栄えた古代文化は「大野川文化」とも呼ばれ、「宇佐・国東文化」とともに大分県を代表するものである。な

かでも磨崖仏を中心とする石造文化財の多さは注目を集める。豊肥本線は犬飼から豊後竹田までの各駅に名所として石仏を持っているほどである。

また、この流域は歴史ドラマの里といってもよい。

まず『日本書紀』や『風土記』は、景行天皇親征の物語を記し、この地が天皇軍と土蜘蛛が互いの血を流しあった戦いの場だと述べる。その真偽はともあれ、縄文・弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の多さや、その出土品などから、この地が豊かな農耕地帯だったことがわかるし、戦いの物語は、朝廷勢力と反朝廷勢力が食糧生産地をめぐる激突したことの反映といつてよからう。

それでもわかるように、この地は勇敢な人々を生み出したところである。例えば天長3(826)年の太政官符には「大野・直入両郡、騎獵の児を出す。兵において要となす」とある。この人々が、豊後武士団につながっていく。

豊後武士団と、その頭領だった豊後大神氏、緒方惟栄などについては、これまでも何度かふれてきた。祖母山の大明神・大蛇を祖先とする伝説が語るように、その発祥の地はここである。その一族として史上に名

■豊肥本線の沿革…

豊後と肥後をつなぐ鉄道の構想が出たのは明治20年代。ずいぶん早い時期である。同25年に「鉄道敷設法」による建設予定線になり、30年には南豊鉄道会社も認可された。

だが、不況のために資金が集まらず、翌年には会社も解散。その後、期成同盟会ができるなど運動は続いたが、戦争などもあって思うにまかせなかった。事情が変わったのは、鉄道国有化に次いで「軽便鉄道法」が生まれ、敷設法に

よらず鉄道が建設できるようになったこと。

さらに、豊肥線建設の先頭に立っていた県出身の元田肇氏が通信大臣に就任する幸運もあって、建設が日の目をみた。名前は犬飼軽便線で大正3年に大分―中判田が開通、6年に犬飼まで。一方、熊本側からは宮地軽便線として7年に熊本―宮地が営業開始。以後、10年に三重町。11年に軽便法が廃止された後は改正敷設法で徐々に延びて行き、昭和3年に玉来―宮地が結ばれて全線開通した。

をとどめる、例えば大野泰基、直入惟友、朽網秀基らは、いずれもこの地方の地名を姓としている。

大野泰基は、鎌倉幕府の世となって大友氏が豊後に入部したさい抵抗した将として知られるが、豊後が大友氏の支配下に置かれた中世を通じて、大野川流域は同氏を支えた根源の地でもあった。そして、近世、流域は岡、臼杵、肥後までの各藩に分けられながら、個性を生んで近代へとつなぐ。

■豊かな緑、美しい水

現在、大野川流域は農業を主とする地帯である。豊かな緑と美しい水。そこに点在する農村。それは、日本ふるさと景観の原点、ともいわれている。そのふるさと、を行く豊肥本線は、すばらしい自然景観と歴史の流れを追うとともに、農の近代化、多様化を軸として、地域振興を目指す活気をたずねる旅を提供してくれるだろう。

⑥4 滝尾

小さな市街地郊外駅

滝尾駅開業：大正 3
(1914) 年 4 月 1 日



◀ 滝尾百穴と呼ばれる横穴墓群（大分市滝尾中学校グラウンド）

■関東からも参拝者

駅舎は撤去され、一本だけのホームに風雨をしのぐだけの待合所がぼつんと建っている。とても大分駅の隣駅とは思えないし、駅だけ見ると山間のローカル駅という感じ。しかし、ホームに住宅ビルがのしかかるように立ち並んでいるのは、さすがに市街地近郊の駅である。

最初の計画によると、駅の位置はいまの場所ではなく、もう少し南の軒田と宮崎の中間あたりにつくられるはずだったらしい。それが滝尾に決まったのは、そこに工場があったからである。

そのころ駅近くには製糸工場が一つと、酒造場、醤油（しょうゆ）工場がそれぞれ二つずつあった。いずれも燃料として石炭を使っており、駅ができると、その輸送が便利になる。そのため工場関係者が地元の人たちに働きかけ、地域ぐるみの期成会を結成、連日のように陳情を繰り返し、さらには用地の寄付を申し出て誘致に成功した。

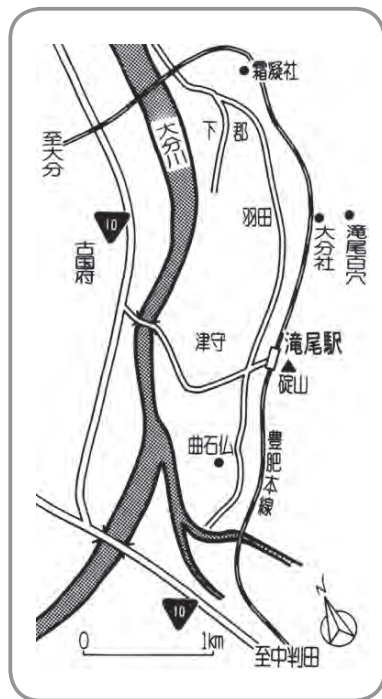
現在、当初予定地の周辺に住宅団地が次々と生まれ、大分大学も移転して一部に「敷戸駅の新設を…」という声が出ているのは皮肉である。

■碓山の一伯霊廟

駅のすぐそばに小丘がある。神武天皇が東征のさいに立ち寄って船をつないだと伝え、碓山という。それはともあれ、古代には大分川のこのあたりまで船が入ったのは本当らしい。

駅一带を津守といい、豊後国府のあった古国府のちょうど対岸にあたる。国府のための津（港）があって、その仕事にあたる津守役人がここに住んでいたか、あるいは給田をもらっていたとも考えられるわけだ。

碓山の頂には熊野神社、中腹には松平一伯（忠直）の霊廟がある。一伯は越前北ノ庄 75 万石を棒にふり、わずか 5 千石の賄料（まかないりょう）で豊後に配流されて一生を終えた。彼が住んでいたのは駅近くの御屋敷と呼ばれるところ。霊廟は六角円堂で、御屋敷にあった墓碑を移し納めている。慶安 3（1650）年 9 月 10 日とある。熊野神社も一伯が勧請したものだ。



■滝尾百穴と大分社

北に行くと滝尾中学校グラウンド横の崖（がけ）に滝尾百穴と呼ばれる横穴墓碑がある。三、四段に並び、確認されているものだけで70基を超える。ほとんどが開口し、早くから盗掘されていて出土品は不明。古墳時代後期の群集横穴としては、大分市内では最大の規模である。ほかに穴井前などの横穴もある。

近くの豊肥本線踏切のそばには大分大明神と呼ばれる大分社がある。

祭神は大分君稚臣と大分君の始祖とされる豊門別。稚臣は壬申の乱のさい大海人皇子（のちの天武天皇）についてたいへんな武勲をたてた人物で、当時の大分国造だろうといわれる。彼が同天皇の8（697）年に死んだので、その徳をたたえて祭ったというが、創祀ははっきりしない。最初は国府近くの上野丘台地にあったのを、貞観11（869）年に滝尾に勧請したとも伝えている。

さらに北には、これも鉄道線路近くに霜凝社がある。風の神といわれる祖母山の神・健男霜凝日子を祭り、ここから地名の下郡が出たらしい。

■曲石仏と西寒多社

一方、駅から南に行くと森岡（守岡）の丘がある。弥生時代の集落跡、中世の守岡とりでの跡として知られていたが、発掘調査ののち小学校が建てられた。中腹には横穴墓と曲石仏（県史跡）がある。

石仏の中心となるのは釈迦堂と呼ばれる石窟。入り口に多聞天、持国天が彫られ、内部にはさらに石室があって丸彫りの石仏が見える。釈迦像といわれるが、実は阿弥陀如来で、鎌倉中期の作らしい。

さらに南に進み、国道10号線を横切って軒田から寒田川をさかのぼると西寒多神社が鎮座する。豊後の式内社六柱のうちの一社で、古い歴史を持っている。万年橋と呼ばれる石造アーチのみごとな太鼓橋を渡ると、左手に名物の御禊（みそぎ）の藤（ふじ）があり、5月上旬の藤祭りのさいが見ごろ。社殿を包む森もすばらしい。建物で注目されるのは宝物殿。大分県内では珍しい校倉造りである。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等
（駅からのおよその距離）

◇碓山・松平一伯霊廟
（0.2キロ）

◇滝尾百穴（1.5キロ）

◇穴井前横穴（3キロ）

◇大分社（1キロ）

◇霜凝社（2.5キロ）

◇曲石仏（1.5キロ）

◇西寒多社（5キロ。バス便を利用するなら大分駅からの方が便利。9.5キロ）

◇敷戸石仏（4キロ。これも大分駅からの方が便利）

⑥5 中判田・竹中

戸次河原の古戦場

中判田駅開業：大正 3
(1914) 年 4 月 1 日

竹中駅開業：大正 5
(1916) 年 9 月 1 日



◀ 鏡城跡から対岸の戸次河原を見る。丘の上に長曾我部信親の墓

■高江峠を越えて

豊肥本線は国道 10 号線と一緒にあって高江峠を越し、大野川の流域に入る。大分川と大野川の両水系の間には台地性の山なみがある。その山なみが両川支流によって大分市南部で最もくびれている部分、この峠である。峠は別名を笹越、草笛峠ともいう。古くから開かれていて、決して高い峠ではないから、ほとんど気にすることもなく通りこしてしまう。しかし、軽便時代の汽車は上りこう配で相当に苦勞したものらしい。一気に登りきれずに途中でストップし、いったんバックしたあと加速をつけて再挑戦することがたびたびだったといわれる。

もう一つの悩みは、峠の頂上で鉄道と道路が交差していたこと。列車回数が少ないとはいえ、この踏切ではずいぶんとひやひやさせられたものである。道路が狭いうえに見通しもあまりきかず、運転者はびくびく。国道の改修でこれは解消されたが、それも近年のこと、いまでも旧道踏切は生き残って利用されている。

■計画を変えた線路

峠を下ると中判田駅。線路がカーブする地点に立

地しているため、島式のホームもカーブしているのは珍しいのではなかろうか。もともとは曲がらずにまっすぐ進み、いまの国道 10 号線と同様に白滝橋あたりで大野川を渡り戸次に抜けるはずだったという。

ところが戸次の人たちの猛烈な反対運動にあい、川の右岸に行く予定が左岸に変更せざるを得なくなったと伝えられる。戸次は大野川の運んだ土で肥沃（よく）な畑地が広がっており、農地を鉄道にとられるのが痛手だったのだろう。

このため線路はかなり苦心して地形を選び、左岸を通っているのがわかるが、そういえば竹中駅的位置も少し変だ。本来は竹中の中心部に置かれてもよさそうな気がするが、いささか離れた川っぶちである。

これも戸次の反対運動にこりて、もともと少なかった竹中の農地をできるだけ減らさないよう配慮



して、駅舎の建設をしたからだとされている。

■豊後と薩摩の戦い

中判田と竹中のちょうど真ん中あたりから、対岸に見えるのが古戦場として有名な戸次河原である。天正 14 (1586) 年の豊薩の戦いのおり、府内 (大分市) に迫った島津軍が、大友を支援する四国勢と激突したところである。

同年秋、二手にわかれて豊後に侵入した島津軍は、あっという間に県南部や西部の城をおとし、大友義統のいる府内へと近づいてきた。大野川下流域に姿を見せたのは、島津家久を総大将とする伊集院久宣、新納大膳正、本庄主税助らの軍勢で、大友が府内の南の守りとしていた鶴賀城に攻撃をかけた。守備していたのは勇将として知られた利光鑑教 (宗魚)。彼は島津軍をさんざん悩ませたが、狙撃されて戦死。これを機に鶴賀城は敗色を濃くした。

一方、府内には、豊臣秀吉の命によって仙石秀久を軍監として長曾我部元親、信親親子や十河存保らの四国勢が応援にかけつけており、鶴賀城の危急を知って救援に乗り出すことにした。

■激突する両軍

12 月 12 日未明、四国勢約 6000 人は府内を発 (た) ち、ほぼ豊肥本線と同じコースで竹中に到着、鏡城に入った。これをみて島津軍は一時的に軍を引いたが、すぐに陣を立てなおし、待ち伏せの態勢をとった。

そうとは知らぬ四国勢は軍議で仙石が渡河作戦を主張、長曾我部や十河の慎重論を押し切って川を渡った。こうして激しい戦いが始まった。一時は四国勢が優勢だったこともあるが、島津軍が多勢をもって総力戦にかかるとともに次第に川岸に追いつめられ、ついに敗走の羽目となった。

このとき四国勢は 22 歳の信親がはなばなく討ち死にしたのをはじめ、存保も戦死。あわせて 700 余人が河原を血に染めたという。島津軍は勝ちに乘じて追撃、同夜は森岡 (滝尾駅で紹介) まで進出、間もなく府内に入った。

長曾我部、十河一族の子孫にあたる人たちは、いまでも毎年のように供養のために戸次河原を訪れる。

<メモ>

周囲にある名所旧跡等 (駅からのおよその距離)

◇戸次河原古戦場 (中判田駅から 3.5 キロ)

◇長曾我部信親墓 (古戦場を見おろす丘陵の上。記念碑なども立ち公園化。同 4 キロ)

◇成大寺 (宗魚の墓や四国勢の記念碑。同 5 キロ。背後の山が鶴賀城跡)

◇楠木生石造五重塔 (県史跡。同 3 キロ)

◇花香キリシタン墓群 (竹中駅から 1.5 キロ)

デジタルブック版

「ふるさとの駅＝各駅停車・大分県歴史散歩＝」（15）

2007 年 6 月 8 日初版発行

筆者 梅木 秀徳

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター

発行 N A N－N A N事務局

〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15

大分合同新聞社総合企画室内

このデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたウェブプロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環として作成・無料公開しているものです。デジタルブックは、ほかにも多数。ネットに接続して上記ボタンを押し、「NAN-NAN」のサイトでご利用下さい。